

# 憶良に於ける詩の形成

——「雑歌」と「雑詩」——

辰 巳 正 明

## 一 はじめに

憶良が人生に関わる苦や愛を以ってその作品の主題とした背景には、奈良朝初頭の儒教倫理や仏教的教理の影響が深く内在すると思われる。憶良は人間の生死の不可知を、維摩大士や釈迦能仁あるいは往昔の聖賢たちの、已に留まらないことを以って、

故知、生必有<sub>レ</sub>死。死若不<sub>レ</sub>欲、不<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>生。况乎、縦<sub>レ</sub>覚<sub>レ</sub>始終之恒数<sub>二</sub>、何慮<sub>三</sub>存亡之<sub>レ</sub>大期<sub>二</sub>者也。(悲<sub>ニ</sub>歎<sub>レ</sub>俗道<sub>レ</sub>仮合<sub>レ</sub>即離<sub>レ</sub>易<sub>レ</sub>去<sub>レ</sub>難<sub>レ</sub>留<sub>レ</sub>詩一首并序)

という。憶良のこの厳しい生への覚悟は、人間の救済され得ない苦の姿と等しく認識されており、それゆえ、世の中を「すべなきもの」と諦観するのである。

憶良が人間の諸々の苦や、父母妻子への愛を認識する中で、世の中の「すべ」のない嘆きを詠むという、言わば人間の生の根源に触れることになるが、そこには人間の苦を愚直なまで見つめ、それを自らの苦として嘆き、人間の救済されない姿を極めて現実的に捉える姿があるのである。そうした憶良の選択する主題が、人間の苦

やあるいは妻子への愛であることに於いて、憶良の作品は十分に人生へ関わるものであると言えよう。

このような人生へ関わる主題を和歌へ導入するのは、もちろん奈良朝初頭の新たな文学的傾向である。人間の八相の姿を見つめ、人生の救済され得ぬ苦を嘆くことは仏教的な認識をもつてのものであるが、それは作品の主題の思索上の問題として当然考えられるべき問題である。そして、そうした思索の中で詠まれるこれらの作品は、和歌の表現を逸脱して詩(漢詩)に近づくものであるといえる。それは『万葉集』に於いて、新たな詩(和歌)の形成を意味するものであったと思うのである。

## 二 苦海と煩惱

憶良が主題とする人間の苦は、どのような思索を経てそれがどのような帰結へと向かうものであるのか。憶良の著名な「思<sub>三</sub>子等<sub>一</sub>歌」(580二一三)は、憶良が愛の中でも子への愛が至上の愛であることを認識することで詠んだものである。序文には、

釈迦如来金口正説。等思<sub>三</sub>衆生<sub>二</sub>如<sub>レ</sub>羅<sub>レ</sub>羅<sub>一</sub>。又説。愛無<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>子。

至極大聖尚有<sup>二</sup>愛<sup>レ</sup>子之心<sup>一</sup>。況乎世間蒼生誰不<sup>レ</sup>愛<sup>レ</sup>子乎。

とのべ、釈迦の説くという「愛無<sup>レ</sup>過<sup>レ</sup>子」ということを以って、子への愛を導いているのである。こうした子への愛は、世間蒼生にとつて道理の姿であるともいう。「令<sup>レ</sup>反<sup>三</sup>惑情<sup>一</sup>歌」(5800—)でも、「父母を見れば尊し 妻子見ればめぐしうつくし 世の中はかくぞことわり」という。父母を尊く思い、妻子をいとしく思うこと、これが世間の道理だとするのは、「世間蒼生誰不<sup>レ</sup>愛<sup>レ</sup>子乎」と述べたことと等しくする態度である。

こうした「愛」の姿を、世の中の道理だとするのは当然のことだといえるのだが、一方憶良はそれを道理だとしつつも、「鶉鳥のからはしもよ行方知らねば」(5800)ともいう。これは、父母を顧みることや妻子をいつくしむことが塵俗における道理であるという<sup>一</sup>ことを比喩的に繰り返したものである。世間の衆生が父母・妻子を尊び愛するという、人としての恩愛の道理は、換言すれば「鳥鶉にかかった鳥の如くにひっかかっている」ことであるに違いない。なぜなら、それは「行方知らねば」であるからだ。鳥鶉の鳥の如く、ひっかかって離れられないもの、それが人間の恩愛の絆であるが、倍俗先生は、この人間の絆を断ち切り、得道の聖となるために父母妻子を穴のあいた沓の如く捨てたのであった(「令<sup>レ</sup>反<sup>三</sup>惑情<sup>一</sup>歌」序)。

憶良が父母を尊ぶこと、妻子をいつくしむことを塵俗の世の道理だと述べながらも、なおそれは鳥が鳥鶉にかかった如くだと比喩することは、その道理を憶良が肯定的に捉えた結果ではないからだともいえる。中西進氏によれば、そうした憶良の姿に「人間への愛が教理を離れて、あくまでも憶良個人の生きた体験の上に顧みられて<sup>(1)</sup>いる」ことを指摘している。憶良は、むしろ鶉鳥の如くひっかかっ

ている中にある道理の姿を見ているのである。それを「世間蒼生」の営みとして捉える。

では、憶良はなぜ人間の愛の姿をわざわざ「鶉鳥」に喩えねばならなかったのだろうか。仏典には「愛河」あるいは「愛欲海」という語が見える。

衆生流<sup>三</sup>転愛欲海<sup>一</sup>(八十華嚴經十三)

愛河乾枯、令<sup>三</sup>汝解脱<sup>一</sup>(楞嚴經)

この「愛欲海」も「愛河」も同じことを指すのであろう。即ち、衆生は愛欲の海に流転し、愛欲が乾枯して後に解脱への道が開かれるのだという。そうした愛欲の中に妻や子への愛があり、その煩惱を捨て去ることが彼岸へ至ることである。「金光明經」には、

捨<sup>三</sup>…所<sup>レ</sup>愛妻子、錢財珍寶、真珠瓔珞、金銀琉璃、種々異物<sup>一</sup>。(空品)

と説く。そのような煩惱を捨て去ることができずに、愛欲の海に流転するのが衆生の姿であらう。憶良がこの愛の姿を「鳥鶉」の鳥の如くであると喩えたのだとすれば、それは世間蒼生が愛の煩惱に溺れる姿への譬喩の中で、妻や子への愛を無条件に讚美しようとしたのではなく、衆生の煩惱としての愛の姿を妻や子への愛の中に見ていたのだと考えなければならぬのである。

このような憶良に於ける愛の認識は、憶良の「悼亡詩」によって一層明白になるであらう。

愛河波浪已先滅 苦海煩惱亦無<sup>レ</sup>結

從來厭<sup>三</sup>離此穢土<sup>一</sup> 本願託<sup>三</sup>生彼淨刹<sup>一</sup>

人は死を迎えて愛河は終息する。それが塵俗の衆生にみる愛の姿であり、その愛欲が滅し、それゆえに煩惱も再び結ぶこともない、

という。この「苦海」を説く悼亡詩は、憶良の愛の認識を十分に保証するものであるといえる。憶良は、愛欲の煩悩を苦海として捉えており、人間の愛の姿を鶺鴒(苦海)に喩えたのである。そこから逸れることが厭離穢土であれば、苦海を逸れ、生を浄土に託せること、それが憶良の本願とするところであった。それでありながら、苦海の煩悩は人々に諸々の苦を以って責め立てる。神龜五年七月の嘉摩郡にあって撰定したという「令反感情歌」「思子等歌」「哀世間難住歌」の三作は、この苦海煩悩を主題とした三部作であるといわれている。<sup>(2)</sup>

愛が苦海の中に捉えられていることを知るとき、憶良の天平五年六月の「老身重病経年辛苦及思児等二歌」(5八九七—九〇三)の作も、この範疇にあることが知られる。憶良は自らの身が老い、かつ病にある中で苦しみ、死を覚悟しながらも、「ことことは死ななと思へど 五月蠅なす騒ぐ子どもを うつつては死には知らず 見つ あれば心は燃えぬ かにかくに思ひ煩ひ 音のみし泣かゆ」(5八九七)と詠む。死によって愛河を断ち、苦海煩悩を去ることを憶良はすでに説いたが、ここにあって子への愛が本願(厭離穢土、欣求浄土)を拒否するものとして大きく動揺する。反歌にも「すべもなく苦しくあれば出で走り去ななと思へど子等にさやりぬ」(5八九九)と繰り返す。これを愛欲海とも苦海煩悩とも言うのであろう。だから、その煩悩を断ちそれらを捨てること、即ち「出で走り去なな」と願うのではあっても、しかし、憶良にとってそれは「石木より生り出し人」(「令反感情歌」)でもあるということになる。そうした相剋の中で、この苦海煩悩を「すべなし」と言わねばならなかったのが憶良である。

憶良が人生の諸苦を主題として歌を詠み序文を記していることは、それらの諸苦が仏教的苦界を認識し思索していることによるのは明白であろう。「哀世間難住歌」(5八〇四—五)の序文に「易集難排八大辛苦」と記す「八大辛苦」は、『涅槃経』(十三)にいう「八相」であろう。憶良の作品がこうした仏教的色彩を濃くもつことは確かであるのだが、しかし、憶良はいずれの作品にあっても仏教的教理に身を託せようとしていない。むしろ人生の苦のあり様の説明として仏教的世界が主題化されているのだと考えられる。このことは、例えば奈良朝初頭の朝廷が「民苦」を救済するために『金光明経』を五大寺に読誦させている(慶雲二年四月)ことや、災害を除くために『金剛般若経』を転読させ(神龜四年二月)、大宰府の疫病により「民命」の救済に同経を読ませている(天平七年八月)ことなどは、およそ異質な仏教の認識であろう。一方は民苦・民命の救済のために經典が読誦され、一方は仏教的苦海を認識しつつも、その苦海から救済され得ない自らを「すべなし」と嘆く。このような憶良の態度は、人生を仏教的苦海煩悩として容認するものでありながら、仏教的教理に身を置こうとするものではない。むしろ、それを歌に託せて嗟嘆する意味は、憶良個人の詩にかかわる認識の問題として存在することを考えなければならぬ。それは、偏に憶良が言う「すべなし」という嗟嘆と深くかかわるからである。

### 三 「すべなし」の原理

人間の苦海煩悩を嗟嘆する憶良は、救済され得ないその心情を「すべなし」と詠む。憶良が人生の苦を主題とする作品に、この「すべなし」の語をひとしく繰り返すのは、憶良の一つの詩の原理

に基づくものであらうと考えられる。中国の詩が悲憤慷慨の詩であることは良く知られている。それを『史記』には、

詩三百篇、大抵賢聖發憤之所為作也。此人皆意有所鬱結、不得通其道也。故述往事、思來者。(太史公自序)

と記すが、それは政治と深く関連することに於いてであらう。『万葉集』にはこのような詩の原理から出発した歌はまず稀であらうが、しかし、憶良は「五臓之鬱結」を写<sup>のぞ</sup>くために歌を詠み(586八序)、また、「二毛之歎」を揆<sup>はか</sup>うためにも歌を詠んでいる(580四序)。そこには、司馬遷の言う詩の原理と対応する認識があるといえる。その後の家持も鬱情を詩の原理として歌を詠み、そして「悽惻之意、非<sup>レ</sup>歌難<sup>レ</sup>揆耳」(19四三九二)と述べたのは著名のことである。「悽惻之意」とは悲しみの情であるが、このどうしようもない悲しみは、歌によってしか揆<sup>はか</sup>うことができないのだとする。悲憤慷慨にしる、鬱結や悽惻の情にしる、それを揆<sup>はか</sup>うことができるのは詩であるという、この詩の原理は、憶良にあっては人生の苦を「すべなし」と歌うことであつたと見られる。憶良の作品にこの「すべなし」の語が見えるのは次のごとくである。

①年月もいまだあらねば 心ゆも思はぬ間に うちなびき臥やしぬれ 言はむすべすむすべ知らに 石木をも問ひ放け知らず (579四「日本挽歌」)

②はしきよしかくのみからに慕ひ来し妹が心のすべもすべなき (579六「日本挽歌」反歌)

③世の中のすべなきものは 年月は流るることし とり続き追ひ来るものは 百種にせめ寄り来る (580四「哀世間難住歌」)

④か行けば人に厭はえ かく行けば人に憎まえ 老よし男はかく

のみならし たまきはる命惜しけど せむすべもなし (580四「哀世間難住歌」)

⑤風雜り雨降る夜の 雨雜り雪降る夜は すべもなく寒くしあれ ば 堅塩を取りつづしろひ (589二「貧窮問答歌」)

⑥楚とる里長が声は 寝屋戸まで来立ち呼ばひぬ かくばかりすべなきものか 世の中の道 (589二「貧窮問答歌」)

⑦すべもなく苦しくあれば出で走り去ななと思へど子らに障りぬ (589九「老身重病経年辛苦及思兒等歌」反歌)

⑧荒袴の布衣をだに着せかてにかくや嘆かむせむすべをなみ (590一「老身重病経年辛苦及思兒等歌」反歌)

⑨大船の思ひ頼むに 思はぬに邪風の にふふかに覆ひ来ぬれば せむすべのたどきを知らに (590四「恋男子名古日歌」)

⑩たぶてにも投げ越しつべき天の漠隔てればかもあまたすべなき (815三)

⑪袖振らば見もかはしつべく近けども渡るすべなし秋にしあらねば (815三五)

これら十一例の中で、⑩⑪は七夕歌であるので直接的に今の問題として扱うことはできないが、作品の位置づけの上で後述することとする。また、この⑩⑪の用例上その性格を金井清一氏は、「内なる悲しみの抑制が不可能であるとか、外なる現実の変革が絶望」であるという意に解されず、字義通り手段・方法がない意であるとしている。そうした例は⑤などにも見られるが、字義通りの例を除いたとしても、憶良の作品に現われる「すべなし」の語は、「死」「難住」「貧」「老身重病」などの、人生の苦にかかわるものであることは否定できない。⑨では神仏への加護を求めながらも、子の死に



去く様を嘆く。ここには「すべなし」の語が結論的に導かれていないが、長歌の末尾に「伏し仰ぎ胸打ち嘆き 手に持てる吾が子飛ばしつ 世の中の道」と詠み、それを「世の中」の道であることを以って知るのであるが、これは「貧窮問答歌」の末尾「かくばかりすべなきものか 世の中の道」と嘆く表現に類似し、その表現の省略体であると見ても不自然ではない。

こうした人生の苦を詠む憶良の作品が、悉く「すべなし」と嗟嘆するのは、苦を世の中の「すべ」のないものと認識する結果だからである。世の中のすべのないもの、それが生・病・老・死・貧などの諸苦であり、それらが仏教のいう八相でありながら、仏教的救いに身を託せることなく、人生の苦の姿を「すべなし」と詠むのであった。その苦界への嘆きは、一方にあっては生への固執としても現われる。憶良は『抱朴子』や『帛公略説』の引用をもって生の姿を問う。「沈痾自哀文」では『抱朴子』の「神農云、百病不<sub>レ</sub>愈、安得<sub>二</sub>長生<sub>一</sub>」や『帛公略説』の「生可<sub>レ</sub>貪也、死可<sub>レ</sub>畏也、天地大徳曰<sub>レ</sub>生、故死人不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>生<sub>一</sub>」<sup>⑦</sup>「生好物也、死悪物也」を引き、長生して更に生涯病患の無いのが幸福であるというのである。だから憶良は「人願天従、如有<sub>レ</sub>実者、仰願、頓除<sub>二</sub>此病<sub>一</sub>頼得<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>平」<sup>⑧</sup>とものべるのである。生は好むべきものでありながら、しかし、生は苦と等距離にある。生あれば必ず死のあることを憶良は認める。「悲<sub>二</sub>歎<sub>一</sub>道仮合即離易<sub>レ</sub>去難<sub>レ</sub>留詩一首并序」には、聖賢と雖もすでにこの世に無く、それを以って憶良は死がいやなら生まれなければ良いのだ、とするのである。

こうした憶良の人生への認識は、漢籍・仏典の知識を一つ一つ積み重ね、納得しつつ自らの思索を開陳するのだが、結局その答えも

人生は撃目の間にあり、肘を伸ばすほど短いものであるから、「心力共尽無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>寄」(「俗道仮合詩」)と、その寄るべの無い人生の無常を詠む。この結論も、歌に即していうならば「すべなし」と言うことに他ならない。

この「すべなし」の語は、もちろん憶良のみに使われるものではなく、『万葉集』には九十例の多きを見る。<sup>④</sup>しかし、憶良の用例は他に対して全く異質であり、その異質さは憶良の作品の質を解き明かす重要な鍵となっているように思われるのである。つまり、憶良のいう「すべなし」とは、憶良がかなり意図的に用いたものであり、それは、いわば憶良に於ける詩の原理としての「すべなし」ということであろうと推測するのである。

この『万葉集』の中に見られる用例を分類して掲げると次のようになる。

- |             |            |
|-------------|------------|
| ① 死(挽歌) 16例 | ② 讃酒 1例    |
| ③ 贈答 20例    | ④ 相聞 9例    |
| ⑤ 従駕 2例     | ⑥ 怨恨 1例    |
| ⑦ 死(雑歌) 3例  | ⑧ 難住 2例    |
| ⑨ 老身重病 2例   | ⑩ 貧窮 2例    |
| ⑪ 寄山 1例     | ⑫ 七夕 2例    |
| ⑬ 寄雨 1例     | ⑭ 詠鳥 1例    |
| ⑮ 寄雪 1例     | ⑯ 正述心緒 10例 |
| ⑰ 寄物陳思 4例   | ⑱ 遣新羅使 1例  |
| ⑲ 恋緒 1例     | ⑳ 放逸鷹 1例   |
| ㉑ 枉疾 1例     | ㉒ 教諭 1例    |
| ㉓ 防人 2例     | ㉔ 問答 5例    |

この分類の中で、③の贈答には家持と池主との贈答4例が含まれており、また、⑭⑯⑰⑱は家持の作に見られるものである。⑲の遣新羅使の歌は「妹に逢はずあらば須敵なみ」(15三五九〇)とあり、妹との別離を嘆くもの。⑳は旅人が「讀酒歌」で「言はむすべせむすべ知らず極まりて貴きもの」(3三四二)と詠み、「すべ」のなさを肯定的に詠むのは他に例がない。内容的には、憶良の如き思想的な意味はもっていない。㉑の「詠鳥」は「物思ふと寝ねぬ朝明け」(10一九六〇)に「すべ」の無いまでに霍公鳥の鳴いていることを詠み、内容上恋に分類することが可能である。

これらの用例の中で、憶良に先行する作品はすべて部立に内包されるものである。その部立に沿って、先の24例を、A挽歌、B相聞及び贈答、C雑歌、Dその他としてまとめると、次の如き傾向を示すのである。

- A群 ①  
 B群 ③④⑤⑥⑪⑬⑮⑯⑰⑱⑲⑳  
 C群 ②⑦⑧⑨⑩⑫⑭⑳㉑㉒  
 D群 ㉓

A群は、人の死に対して「すべなし」と詠まれ人麻呂に多用される<sup>(5)</sup>。B群は、ほとんどが恋を詠んだものであり、贈答も含まれる。

⑤の「從駕」の2例はいずれも「相聞」に分類されているもので、金村作の「幸紀伊國之時為贈從駕人所詠詠娘作歌」(4五四三)と、「幸三香原離宮之時得娘作歌」(4五四六)の二作である。C群は雑歌を主とするが、⑭の「詠鳥」とあるのは内容的には恋と思われるものであった。また⑳の旅人の例は異例であり、用法上D群のその他へ含ませるべきかと思う。この二例を除くと、C群

は人間の諸苦にかかわるものであって、憶良作以外では、㉑㉒は家持作の「病」と「惑」が主題であるところ、憶良の世界を継承したものである。㉓の「防人歌」は、家郷との別離を歎くもので、それは主題化を意図したものではないが、人間の愛別離の苦が「すべなし」の語を導いている。㉔の「七夕」がここに含まれるのは、それが雑歌だからではあるが、その必然性については後述する。

A B Cの各群に分類されたこれらの作品は、Aが死を、Bが恋及び贈答を、Cが苦をそれぞれ内容として詠まれていることが理解できよう。つまり、『万葉集』にあって「すべなし」と歌うことは、例外を除くとおおよそ「死」と「恋(贈答)」と「苦」についてであると整理することができるのである。その中において、「苦」の「すべなし」を詠むのが憶良であることを確認することができると思われる。人が死に対し、その事実を「すべなし」と感得するのは、かなり必然性のあるものであり、そして、それが恋にあっては、その感情が「すべ」のなさにかかわるのは死の場合と同様かなり必然性のあるものである。しかし、人間の苦を以って、その苦を「すべなし」と意識するのは死や恋と等質のように思われない。

金井清一氏は、憶良の「すべなし」の語が人麻呂を継承しながらも、同時に「自己の外部の現実を客観的に表現する志向」を見せはじめの中で、「理性的認識」をもって「その結果を容認し得ぬ激しい感情」が「すべなし」の語を造型したのだとするのである<sup>(6)</sup>。そのような憶良の認識は、たしかに死や恋の場合の如く、それを主情的に捉えたことによるものではないだろう。人間の苦という素材自体が、すでに文学として選択された素材であった筈であり、そうした憶良の視点から導かれた「すべなし」の意識も、作品としては十分

に意味を内包させた表現であったと思われる。そこに憶良が意図する表現、すなわち詩の原理が働いているのだと推測するのは首肯されよう。「すべなし」と歌うことが、例外を除くと主に死と恋に於いてであったのだが、それを部立に従うとおよそ「挽歌」と「相聞」という分類になる。「すべなし」の語の殆どは、この部立の中に収斂される訳であって、C群に於ける⑦⑧⑨⑩の四種九例は、憶良が人生の苦を「すべなし」と詠んだものであり、それを先の部立の概念からすれば「雑歌」であると考えることは許されよう。憶良に於ける詩の原理とは、この雑歌性の問題である。

#### 四 雑歌と雑詩

卷五の巻頭には「雑歌」とある。<sup>(7)</sup>卷五の諸歌が雑歌の部立のもとに分類されていることが事実として認められるところから、憶良の「すべなし」と詠む卷五所載の作品について、それを「雑歌」ではないかと問うことは、もちろん分類の意味からではない。雑歌の本質の意味の問題としてのそれである。

卷五の分類が「雑歌」にあるとき、卷五に配列された作品がその分類と矛盾を起こすことは明白である。卷五には次の如き憶良の作品が収録されているからである。

##### (イ) 悼亡詩文

(ロ) 日本挽歌 (579四―九)

(ハ) 敬下和為熊擬述其志歌上 (58八六―八九一)

(ニ) 恋三男子名古日一歌 (5九〇四―六)

これらの作品は、いずれも憶良が身近かに人の死を体験し、その死を悲しみ詠んだものであり、特に(ロ)は「日本挽歌」とまで記され

ているのである。にもかかわらず、これらが「挽歌」として分類されず、「雑歌」として扱われたのはどのような理由からであろうか。

「雑歌」の意味を真淵が「行幸、王臣の遊宴、旅、このほかくさぐさの歌」としたのは、<sup>(8)</sup>『万葉集』の雑歌から見た場合正しい指摘であった。この雑歌の語は、「挽歌」とともに『文選』に見えることは岡田正之氏の指摘する通りである。<sup>(9)</sup>「雑歌」は相聞や挽歌に属さない種々の歌を集めたものであるが、それは伊藤博氏によれば、万葉集歌中で「最も本格的な公の歌群」という独自性をもつものである。換言すれば、それは「最も晴がましい歌」ということであり、そこに「雑歌」の性格を見ることができるのである。<sup>(11)</sup>

このような雑歌の晴がましい、公的歌群の歌々に較べて、卷五雑歌の憶良に見る人生の苦を詠む作品群はどのように理解すべきであろうか。雑歌にあっても、行幸・遊宴・旅などの晴以外の雑歌を一括して「くさぐさの歌」として理解することもできる。しかし、そのように理解するとしても、先掲の「挽歌」や人の死を内容とするものをもくさぐさの歌の範囲で理解しなければならなくなるのである。それらをも含めて、憶良の作が「雑歌」であることを説明できる根拠が見出されなければならない。

それでは、憶良の作品は晴がましい雑歌に背きながらも、なぜそれらが雑歌であり得るのか。ここに憶良の作品の「雑歌」としての本質が存在するように思われるのである。

「雑歌」が『文選』に見る「雑歌」に基づいたことは、すでに指摘されているが、しかし、『文選』の「雑歌」は、

歌一首(判軻)

歌(漢高祖)

扶風歌(劉越石)

中山王孺子妾歌(陸韓卿)

の四首を収めるのみで、その性格は楽府中の古歌に属するもの、及びその流れを汲むものであり、歌謡的性格が濃く、『万葉集』にいう「雑歌」とは必らずしも一致するものではない。このことから、むしろ『文選』の大みだしの「雑」をもつ「雑詩」によつたとする<sup>(12)</sup>のは小島憲之氏である。その『文選』には、

雑歌

雑詩

雑擬

の分類が見られ、「雑歌」が四首のみを収録するのに較べて、「雑詩」「雑擬」の詩数は三卷一五九首に及び老大な規模をもっている。これらのみだしの「雑」や「雑擬」の雑を考え合せ、大みだしの「雑詩」という名目から、『万葉集』の「雑歌」が誕生したとするのは妥当性があるであろう。『万葉集』の編者は、詩と歌の区別は明白に認識していた筈である。

だが、『万葉集』の「雑歌」を、『文選』の「雑詩」によるとしても、内容的には『万葉集』の「雑歌」とはやはり一致しない。もし、「雑歌」を『文選』の分類と対応させるならば、『万葉集』の「雑歌」は次のようになる筈である。

文選 万葉集

公讌 遊宴・宴の歌

遊覧 行幸従駕の歌

遊仙 神仙の歌

祖餞 送別の歌

贈答 贈答の歌

行旅 羈旅の歌

楽府 東歌・防人歌・古歌謡

郊廟 雄略聖婚歌・国見歌・祭神の歌

例外 有由縁并雑歌

この『文選』の各部立が『万葉集』の「雑歌」の種別と右の如く対応すると思われる。『万葉集』の雑歌は、更に四季別分類を取るが、この分類は『万葉集』独自の方法なのか、あるいは他に模範とする分類方法があったのか。中西進氏は四季別分類が楽府などの「子夜四時歌」によるという指摘をしているのは参考になろう。<sup>(13)</sup> いま、季節分類の雑歌を除くとしても、この対応の中で『万葉集』の「雑歌」が位置づけられるべきであったといえよう。しかしながら、『万葉集』の雑歌は「相聞」「挽歌」をまずもって分類し、それらに入らないその他の歌を集め、それをもって「雑歌」とし、三大部立を設定することによって雑歌に於ける矛盾を生じたのだと言える。雑歌に「晴」の性格を認めるのは、こうした雑歌のあり方から見れば当然であり、『万葉集』の雑歌はそのことよつて種々の性格を混在させる結果になったのである。

この『文選』の分類との対応からすれば、晴の雑歌はむしろ雑歌に分類すべき性格のものでないことが理解できる筈であり、もし、分類するとすれば右の如くなる筈である。

このように『万葉集』の雑歌を分類した場合に、「雑歌」として残り得る『万葉集』の雑歌は、実は憶良の作品を主とするところのC群についてであることが知られるのである。憶良の作品はすでに

述べた如く、人生の諸々の苦に対し「すべなし」という嘆きを述べるのであったが、そうした人生を嘆くことを詠むのが『文選』の「雑詩」に見る特徴である。この事情は、『古今集』に部立としてある「雑」のあり方によっても明らかとなる。『古今集』は周知のように巻十七と巻十八の両巻に「雑歌」(上・下)を収め、巻十九には「雑体」が収められている。この部立の方法は『古今集』独自の分類方法を取りながらも、『文選』を母胎としているものであると考えられ、巻末に「雑歌」を配するのはそれを示唆するものである。また、「雑歌」の内容を見ても、殊に「雑歌」の下巻は、世の中を「憂き世」として嘆く歌が殆どであって、人生の無常を詠むところに『古今集』の「雑歌」の特徴が見られるのである。そのことも、『文選』の「雑詩」と対応することに於いてであると考えなければならぬ。

『文選』の「雑詩」は、まずその冒頭に「古詩十九首」を載せている。ここには人生そのもの及びその苦しみが多く詠まれるのである。その古詩は、

- ① 人生三天地間<sup>一</sup> 忽如<sup>三</sup>遠行客<sup>二</sup> (第三首)
- ② 人生寄<sup>三</sup>二世<sup>一</sup> 奄忽若<sup>三</sup>飀塵<sup>二</sup> (同四首)
- ③ 一彈再三歎 慷慨有<sup>三</sup>余哀<sup>二</sup> (同五首)
- ④ 良無<sup>三</sup>磐石固<sup>一</sup> 虛名復何益 (同七首)
- ⑤ 四時更變化 歲暮一何速 (同十二首)
- ⑥ 人生忽如<sup>レ</sup>寄 壽無<sup>三</sup>金石固<sup>一</sup>
- 万歲更相送 聖賢莫<sup>三</sup>能度<sup>二</sup> (同十三首)
- ⑦ 出<sup>三</sup>郭門<sup>二</sup>直視 但見<sup>三</sup>丘与墳 (同十四首)
- ⑧ 生年不<sup>レ</sup>滿<sup>レ</sup>百 常懷<sup>三</sup>千歲憂<sup>二</sup> (同十五首)

⑨ 漂々歳云暮 螻蛄夕鳴悲 (同十六首)  
 ⑩ 愁多知<sup>三</sup>夜長<sup>一</sup> 仰觀<sup>三</sup>衆星列<sup>二</sup> (同十七首)  
 ⑪ 憂愁不<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>寐 攬<sup>レ</sup>衣起徘徊 (同十九首)

とあるものである。①から⑧までは、自然の移り変りとともに、人生の無常を嘆く詩である。栄名を求めても得られぬことの苦しみや、人生無常ゆえに酒を飲もうという、享楽への志向、あるいは、立身した友人が自分を見棄てたことに対する怨みなど、いずれも人生の無常を背景としながらそれを嘆く詩である。⑨から⑪は、旅に出た夫が長い間帰らず、家に待つ妻の嘆きを詠んだもの。それは、相聞的世界であるよりも、むしろ人生の無常に主題の存するものである。

「古詩十九首」が『文選』「雑詩」の巻頭に捉えられている意味は、それが古詩であるという理由許りではあるまい。この「古詩十九首」が「雑詩」を象徴する詩群であるという意味に於いてである。憶良がこの「古詩十九首」の影響を受けていることは「沈痾自哀文」で、

千年愁苦更<sup>レ</sup>繼<sup>二</sup>坐後<sup>一</sup> 古詩伝、人生不<sup>レ</sup>滿<sup>レ</sup>百何懷<sup>三</sup>千年憂<sup>二</sup>矣。

と、「古詩」を引用するところにも現われている。また、⑥の「万歳更相送、聖賢莫<sup>三</sup>能度<sup>二</sup>」(第十三首)という人生の無常にあっては、憶良が、

二聖至極不<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>弘<sup>三</sup>力負之尋至<sup>一</sup> (悼亡詩序)

所以千聖已去、百賢不<sup>レ</sup>留。况乎凡愚微者何能逃避 (敬<sup>下</sup>和為<sup>三</sup>熊疑<sup>一</sup>述<sup>三</sup>其志<sup>二</sup>歌<sup>上</sup>序)

先聖已去、後賢不<sup>レ</sup>留。如有<sup>三</sup>贖而可<sup>レ</sup>免者、古人誰無<sup>三</sup>価金<sup>二</sup>乎 (悲<sup>三</sup>歎俗道仮合即離<sup>レ</sup>易<sup>二</sup>去難<sup>レ</sup>留詩序)



と繰り返す、死への意識を想起するであろう。

この「古詩十九首」について、内田泉之助氏はその内容から、「世道の衰微に伴ふ人心の不安、乃至享樂的傾向を反映したもの、悲觀厭世の思想を詠出したもの」など、それらは「世紀末的気分」が濃厚であると説明している。<sup>(14)</sup>これは、古詩に限らず「雜詩」の特徴が「歎き」にあることから見れば、十分に理解できるであろう。その「雜詩」には「憂思」や「慷慨」の語が多く見られるのである。

⑫ 日暮遊西園 冀写憂思情 (王仲宣)

⑬ 去去莫復道 沈憂令人老 (曹子建)

⑭ 絃急悲聲發 聆我慷慨言 (曹子建)

⑮ 永思慮崇替 慨然独撫膺 (張茂先)

⑯ 壯齒不恆居 歲暮常慨慷 (左太冲)

などはその一部であり、こうした「憂思」や「慷慨」などは人生のすべない嘆きを指すものであり、憶良に則して言えば、「すべなし」ということになる。そのような人生への歎きは、「貧」や「老」の歎きとしても現われるのである。

⑰ 榮与壯俱去 賤与老相尋 (張季鷹)

⑱ 富貴他人合 貧賤親戚離 (曹顔遠)

⑲ 疇昔歎時遲 晚節悲年促 (張景陽)

この「貧」については、先掲「古詩十九首」の中にも、

⑳ 何不策高足 先拋要路津 無為守窮賤 轆軻長苦辛

(第四首)

と詠まれており、不遇の中での貧窮を憤る。かつ、「貧」については、陶淵明の著名な「詠貧士」の第一首が収録されている。その中

に、

⑳ 量力守故轍、豈不寒与飢、知音苟不存、已矣何所悲とあって、自分の貧の意味を知る者もなく、従って悲しんだところでどうしようもないのだ、と絶句する。この陶淵明の「貧士」を意識し、「貧窮問答歌」の中に貧士を登場させて問者の姿を造型したのが憶良であった。<sup>(15)</sup>あるいは、後世に名を立てることのないことを嘆いて詠む、「古詩十九首」の、

㉑ 盛衰各有時、立身苦不早、人生非金石 (第十九首)

というのは、憶良の辞世の歌とも言われている。「沈疴之時歌」に、

士やも空しくあるべき万世に語り継ぐべき名は立てずして

(6九七八)

と詠む、立名への嘆きを十分に示唆するのである。<sup>(16)</sup>

この雜詩には、更に孤閨の妻に代ってその悲愁を詠む、所謂代詠の詩も多く見られるのを特徴としている。その内容的な関連は別として、憶良の作品に代詠がいくつか認められることは、雜詩に於いて見られる代詠詩との間連が当然問題となることであろう。この代詠とかかわるものに七夕詩がある。雜詩は謝惠連の「七月七日夜詠牛女」を収めるが、この詩は憶良が天平元年の七月七日の夜に独り天河を仰ぎ観て詠んだという、七夕歌(八一五〇—二)の長反歌三首のモデルとなった詩ではないかと思われる。詩の前半が長歌と、詩の後半が反歌と対応していると思われる、大きく相違するのは詩が「靈駕」を詠むに対し、歌が「舟」であることだが、それは彼我の風土によるものである。このことは当面の問題ではないのでいま触れることは避けるが、憶良が「応令」の作も含め養老末年から天平初年まで、十二首の七夕歌を残しているのも、そうした素材

を選択するところに、憶良の雑詩的性格を見るのである。

『文選』の「雑詩」には、その題詞に「四愁詩」(張平子)などと記すのもあるように、その性格は人生の短かく、苦しみの多くあることをもってそれを慷慨し憂思することを多く詠む詩であることが確かめられたと思われる。そして、そのような「雑詩」に対して、憶良の「雑歌」がそれらと対応していることも確かめ得たと思うのである。巻五の編者が、巻五収録の作品の内、挽歌や人の死に関わるものをも「雑歌」と認定したのは、正しい見解である。それらは、人の死を悲しむものではありながらも、それを人生の苦や無常の中で捉えたのであり、そうした人生の苦や無常を「すべなし」と嘆くところに、それらの作品の意味が存在したのである。決して「相聞」「挽歌」以外の歌という認識からではないのである。

こうした『文選』『雑詩』の性格について、憶良は十分理解していた筈である。憶良の作品が『文選』の「雑詩」と対応するという事実は、憶良の作品が本質的に「雑詩」であるということに他ならない。憶良の作品がかかる『文選』の「雑詩」と対応することによって、そこに『万葉集』は新たな「詩」を形成することとなったのである。

## 五 まとめ

八世紀初頭に於ける、律令国家発展期の中で、一方にあっては人間の苦を詩題とする強烈な個性の文学の登場を可能とした。近江朝以降の急激な外来の文化や、あるいは文学の受容と理解は、人間の姿を自覚させ、覚醒した知識人(官僚)文学の出版を告げるものであった。仏教的思想はもちろん、中国文学、殊に『文選』は奈良朝知

識人の文学における確乎たる規範であったといえる。同時代の大伴旅人も、「讚酒歌十三首」を詠み政治に背を向けるのであったが、このような思想の登場は、まさにこの時代の一つの思潮を反映したものであった。

憶良が人生の諸々の苦を詩題として和歌を詠むことは、その内容的な苦が仏教的苦海煩惱であるだけに、奈良朝初期の仏教の問題が当然考えられるべきであるのだが、そこには、仏教的教理もあるいはその救済も説かれてはいないのであり、むしろ、それらの苦が救済され得ないことを嘆くのであって、それは新たな詩の形成の問題として示唆しているのである。仏教的な苦を詩題として詠むことは、詩にあっても見られることであり、例えば釈亡名氏は「五苦詩」として生・老・病・死・愛離の五苦を詠んでいるが(全北周詩)、それも教理や救済を説くのではなく、人生の無常を視点に据えてのものである。憶良がそうした仏教的苦界を主題にしながらも、仏教的救済を詠まないのは、人生の諸々の苦が、結局は仏教的苦界にあることを知識的に確認したことによって、それを仏教的苦から選択したということなのであろう。そうした苦界の思索の結果、憶良が帰結するのはいずれも「すべなし」という絶望であった。

こうした人生の苦に対して「すべなし」と詠む歌が登場するのは、この憶良にあってである。この「すべなし」という嘆きは、単に主情的に発せられる詠嘆の語ではない。詩の原理としてのそれである。だから、この「すべなし」は、最も多く見られる相聞や、あるいは挽歌に見るそれとは性格を異にすると考えなければならぬ。憶良におけるこの詩の原理は、『文選』の「雑詩」における詩の原理と対応することによって形成された、「雑詩」の問題として

のそれであったのである。『万葉集』の「雑歌」を『文選』の分類に基づいて分類しなおすことによって、そこに憶良の作品が「雑詩」と対応することが理解できたのであるが、そのことによって、『万葉集』は、新たな「詩」を形成することとなったのであった。

註

(1) 「嘉摩三部作」「山上憶良」。

(2) 中西進氏前掲註1。

(3) 「『すべなし』と歌うことは、続稿——憶良・家持の場合——」「論集上代文学」第三集。

(4) 異訓の例を除いて掲げると、各巻次の通りである。

巻	数
2	5
3	7
4	10
5	9
7	1
8	4
10	3
11	7
12	11
13	12
15	7
17	8
18	2
19	2
20	2
計	90

(5) 作歌には4例(2一九六・二〇七・二一〇・二二三)、歌集歌に1

例(11二三八六)。ただし「無乏」「及乏」「乏」を含めると歌集歌は6例となる。

(6) 金井氏註3論文。

(7) 但し、紀州本・細井本にはない。

(8) 『万葉考』巻一之考。

(9) 「漢文学と万葉集」「近江奈良朝の漢文学」。

(10) 『万葉集相聞の世界』

(11) 岩波日本古典文学大系『万葉集一』解説。

(12) 「万葉集の三分類」「上代日本文学与中国文学 中」

(13) 『万葉の詩と詩人』「自然」の頃。

(14) 『中国文学史』

(15) 拙稿「貧窮問答歌——憶良に於ける『貧窮』の意味——」「日本文学研究」19号(大東文化大)。

(16) 拙稿「『土』憶良の論——土の不遇によせて——」「古代文学」16号

小論は昭和55年6月の「古代文学講座」に「主題としての人生——山上憶良を窓として——」と題して口頭発表したものであります。